

観音

平成5年3月

第18号
年2回発行
発集発行

広島県安芸郡府中町
茂陰2丁目2-8-10
真言宗 正観寺

小出真行



故 正観寺 権大僧都 真空和尚

『えらい人になるより

ありがたい人になろう』

「阿字の子が

阿字の古里 立ちいでて

また立ち帰る

阿字のふるさと」

〈高祖弘法大師 第三番の御詠歌〉

私たち人間は、縁をいただいて大自然・大宇宙より、この世に生を受け、そして縁が尽きれば、再び大自然・大宇宙に還っていくのです。

ですが『生者必滅・会者定離』

理屈では、解っていますが、別れとは、なかなか悲しみ深いものです。

「故古田真空和尚を偲んで…」

下村 末信

仏法というものは、遠いところにあるのではない。近いも近い心中にあるのだ。真理を実体的、客観的存在と思うならば、それはまちがいである。自分の身を離れてどこに仏法があろう。迷いも悟りも、ともに自分にある。ゆえに仏道を修めようと思ったとき、そのときに仏法を得ているのだ。光明も暗もまたほかにあるのではない。信じて修行するならば、この事実を証らかにすることができよう。と弘法大師は教えて居られます。

今は亡き故古田真空和尚と共に同行二十五名一昨年四国霊場巡拝の折り皆さんは一日、二日、三日目と日を重ねるに従って、漸く般若心経の読誦にも慣れ、次第にお経の中に自分を入れ込み、一体感が感ぜられるようになった五日目のことです。四十一番霊場隆光寺に於いて、声高々と般若心経の読誦を始めると、その声は

本堂の周囲の杉木立に響き渡り何とも言えない清浄さを感じました。その時です、私達の巡拝バスの添乗員さんが納経所で

納経帳の整理をして貰って居る最中その住職さんが、突然「何といいお経が上りよるのお！久し振りにいいお経に会ふことが出来た。」と、感嘆の声を揚られました。亦翌六日目の最後の五十一番霊場石手寺の大師堂での鐘を打ち鳴らしてお経の読誦、そして願わくはこの功德を以てあまねく一切に及ぼしわれらと衆生と皆俱に佛道を成せん！深く頭を垂れ、漸く顔を揚げたその面には、誰も彼もが一樣に頬に涙が流れて居りました。有難うありました。お陰さまでしたと心から佛様に感謝の気持が味合えた感動の涙ではなかったでしょうか。「信じて修行するならば、この事実を証らかにすることができよう」というお大師様の教えが真実のものとして味合えた貴重な体験でした。今は亡き古田真空和尚との懐しい数々の思い出の中から、特に私の心に深く感銘

として刻み込まれた気持ち、御冥福をお祈りしながら申し述べました。

合掌

「お寺詣り」

田村 雄快

身内の誰かが、死亡しますと、何はともあれ寺院に連絡をとることになります。死者に対して、引導をわたしてもらい、戒名を授かり、葬儀を営むためです。ところで信仰と言のは本来は個人のものであると言えますし、壇那寺と壇家といった寺院と家との関係で宗教が結合して居ると思えます。何故に宗教が個人の信仰としてではなく家と結びつくものとなったのでしょうか？

国民の大部分は仏教徒とされながら仏教あるいは信仰とは無縁で、寺院とは先祖の葬送儀礼のみを司る所と、いった概念が一因と成ったと言って、過言ではないでしょう。

本来寺院というのは、信仰の道場で有る事を忘れてはならないと思います。葬式。法事。盆。彼岸。祭。等お寺の行事の時だけでなく、諸事。信仰。相談。等お寺を文字どおり信仰の場として活用したいものです。

昨年四国八十八ヶ所霊場巡りを終えいまは亡き老師をはじめ皆様のおかげで満願成就の喜びにひたる事が出来有難う御座いました。

参道で見知らぬ人達から「もうすぐですよ、ご苦労さま。」の一言に励まされ坂道を登る。時にはご住職の語らいや、心温まる接待、土地ならでわのグルメの味等、良き思い出と成りました。これからも無心に歩いて寺院巡りの旅を続けたいと思つてます。

生前老師には、何かと御世話に成り、感謝をこめて冥福をお祈り致します。

合 掌 平成五年二月吉日

「心の糧」

木村 弘全

昨年九月に小豆島先達講習会に参加させて頂きました。「いのち燃やそう出合い。ふれ合い、つくし合い!!」霊場巡拝のテーマです。長寿と遍路の講演の中で『怒る（腹を立てる）のが悪い。怒った時に和紙に息を吹きかけて水にさらすと黒く色が残る』そうです。心経を唱え忘れる様つとめる。人にはそれぞれ一つだけは絶対に我慢しなければならぬことが有るそうです。それが何んであるか、人それぞれ違いますが人間である明しとなります。今この世に生を受けていることが有難いと思える人が本当に幸わせなのです。お遍路さんは弘法大師の足跡を慕つて巡拝しています。数多くの人々と出合いの中で普段忘れていた無垢な心を再発見するのです。自分の内なる心に大師を見出すことにほかならない気がするのです。巡拝はまさしくどこかに置き忘

れた魂を、あるいは霞がかかって見えにくくなつてしまつた魂を取り戻す旅で有つてほしいそうです。今年八月に修行大師像が製作され十月には西安市青竜寺にて開眼供養が行われます。来年一月二十一日島開き法要に大師像と共に土庄港より霊場総本院まで上陸団体。巡拝者。島内寺院協会員一同で盛大に練供養が行なわれます。春期巡拝期に各霊場寺院に巡回安置されます。

老祖との思い出は沢山有りますが特に小豆島、本四国巡拝の時のことは今も深く心に残っています。ヘルペス神経痛を庇いながら一生懸命力を出し盡された様です。私自身神経痛との付き合いはあの世迄も道連れすることになるでしょうが痛みを感じる度に有りし日の老祖を思い出します。巡拝の御世話は本当は大変であつたと痛感しています。三月には小豆島巡拝致しますが締切日に定員越えとなりました。これしも老祖のおかげではと思つています。あり難う御座居ました。老祖

の心を胸に抱き、

権大僧都古田真空和尚のご冥福を心に祈念して巡拝に行かせて頂きます。

「正観寺 権大僧都

真空和尚 還化」

平成五年二月四日、午後五時二十五分、権大僧都 真空和尚は、行年七十二才にて永眠致しました。

思い起せば、昨年小豆島巡拝の後、体の不調を訴え二週間余り近くの病院に入院し、その後通院しながら、四国霊場、石鎚山巡拝と衆生教化の遍路に情熱を注いでおりましたが、その頃から病魔が少しづつ体を犯していたと思われます。八月末に精密検査を受け、その結果急遽、日赤病院に入院し、それから五ヶ月の間は入院を繰り返し不思議な事に毎月十八日の観音日には仮退院が続いていました。入院当初には、敗血症も併発しましたが、本尊様と千巻経を一心にあげてい

ただいた皆様のお陰を受け病魔にも打ち勝った様に見えました。でもやはり病魔には勝てず、皆様の前に最後に姿を見せた十二月十八日の月並観音日には、身をもって体験した

『健康であることの素晴らしさ』

を述べたことは真にせまり深く、胸に残っています。年を明けると次第に体も弱り一月、二月と病状は悪化し、ついに二月四日に他界致しました。

生前中、皆様方には本当にお世話になり有り難うございました。又、通夜、葬儀には、御多忙にもかかわらず、御列席いただきまして厚く御礼申し上げます。きっと此岸より彼岸に致り満足しているものと信じています。これから私を中心となり、寺門興隆の為により一層精進いたす所存ですので今後ともよろしくお願い致します。

平成五年度の主な行事

- 一月 一日、三日 修正会
- 二月 三日 星祭
- 三月 十四日 観音大祭
- 三月 二十日 春季彼岸廻向
- 三月二十七日、三十日 小豆島巡拝
- 七月 二日、三日 石鎚山参拝
- 八月 十五日 盆供
- 八月二十四日 (施餓餽供養) 地藏祭り
- 九月二十二日 秋季彼岸廻向
- 十二月三十一日 年越祭
- 毎月十八日 月並観音供